

同調性の差異が金銭損失リスクの受容に及ぼす影響

下村 優月

普段の生活の中で、周りの人間に合わせて行動することは、「同調」と呼ばれる。これまで同調に関する研究は多くなされてきたが、その多くは、同調を行う人間のパーソナリティや環境に着目しており、同調を行うことによって発生するリスクを扱った研究は少ない。そこで本研究では、同調に関する新たな知見を獲得すべく、同調性とリスク認知の関係の調査を目的とした。今回取り上げたリスクは、ギャンブルを通じて発生する金銭損失リスクである。その理由としては、これまでギャンブルに関する研究もまた多く行われてきた中で、ギャンブルに同調することによって、周囲の人間との繋がりを保つ場合があるという結果を示した研究がいくつか存在するにもかかわらず、ギャンブルに伴う金銭損失リスクと、個人の同調性との関係を調査した研究はなされていなかったからである。本論文では、同調性とギャンブルにおける金銭の損失リスクの受容との間にどのような関係が存在しているのかを、実験Ⅰと実験Ⅱと通じて検討した。実験はともに匿名の質問紙調査で行った。両実験の対象者は関西の大学に通う大学生であり、実験Ⅰでは男性39名、女性45名、その他2名の計86名、実験Ⅱでは男性48名、女性44名、その他1名の計93名であった。

実験Ⅰでは、ギャンブル課題を設定し、その参加意思と、賭け金を痛手だと思うか、という2つの項目を測定した。そのほかに五十嵐・野村・岩崎(2014)で作成された同調傾向尺度において個人の同調性を測定した。実験Ⅰでは「同調性が高い者においては、単独の場合は賭ける金額が増していくほどギャンブルへの参加意思は低下していく一方で、友人同伴の場合では高い設定金額でも参加意思が高いまま維持される」、「同調性が低い者においては、賭ける金額が増していくにつれてのギャンブルへの参加意思の推移は、単独の場合と友人同伴の場合で変わらない」、「同調性が高い者ほど、友人同伴条件で単独条件よりも各設定金額を痛手だと思わなくなる」という3つの仮説を設定したが、結果は全て不支持となった。その過程で使用した同調尺度の妥当性の検討が必要であること、そして人数による同調効果を詳細に検討出来ていなかったことが考察されたため、ギャンブル課題を変更し実験Ⅱを行った。

実験Ⅱでは、品川(2010)の「修正・日本語版 SOGS 学生用」を用いて実験参加者のギャンブル依存度を新たに測定し、ギャンブル課題では賭ける金額を実験参加者が自由に回答できるように変更した。実験Ⅱでは、仮説Ⅰ「1人でギャンブル課題に臨む場合、賭け金が2倍になって戻ってくる場合よりも、5倍になる場合に賭ける金額は増加する」、仮説Ⅱ「ギャンブル依存度が高い人ほど、2倍・5倍どちらの場合でも賭け金は大きくなり、それは5倍になる場合でより顕著に表れる」、仮説Ⅲ「賭け金を提示する人物がいる場合、提示額がいくらの場合でも、その人数が1人のときよりも2人の場合においてより同調効果が働き、実験参加者は提示された金額に近い額を賭けやすい」、仮説Ⅳ「同調性が高い人ほど、仮説Ⅲの傾向が顕著に表れる」の4つを立てた。結果仮説Ⅰと仮説Ⅲは支持され、仮説Ⅱと仮説Ⅳは不支持となった。実験Ⅱでは、影響を与える人数が1人より2人の場合でより同調効果が働くこと、そして実験でのギャンブルのシナリオにおいては、10万円を所持している状態では、2万円の金銭損失リスク下では同調効果が働き、5万円や8万円の金銭損失リスク下では同調効果が働かないことが考察された。

以上より、本実験の結果から、金銭損失リスクが小さい場合に同調の効果は大きく働き、金銭損失リスクが大きくなると同調の効果は小さくなることが分かった。(安全行動学)